



水の道

ぜんこくのうきようきようどうくみ あいちゅうおうかい かいちようしょう
全国農業協同組合中央会会長賞

新潟県佐渡市立後山小学校六年

山郷一龍

「ブルンブルン、ブルルルブルン。」

エンジンの音が響いた。ぼくは少し気になって外に出てみると、田んぼのポンプのそばでお父さんが困っている様子だった。ポンプで井戸の水をくみ上げて、田んぼに水を入れるのだ。

「エンジンはかかるのに、水をすい上げないぞ。きのうはできたのに、おかしいなあ。」

お父さんは、もう一度エンジンをかけた。だめだ。ポンプが壊れてしまったらしい。

田んぼの水の管理は、いつもおじいちゃんがしてくれていた。でも、おじいちゃんが入院しているのだ。おじいちゃんは、毎日、朝早くに起きて、田んぼの様子を見ながら、水を入れていた。ぼくはそのことを思い出して、夏のこの時期は、稲にとって水が一番大切なんだとわかってきた。

ぼくは、五年生の時から、佐渡市のkids生き物調査隊に所属している。去年は田植え、田んぼや川の生きもの調査、そして稲刈りを体験した。調査隊の田んぼでは手作業だ。かまで稲を刈った時のザクツという音と感覚が好きだ。わらでしぼるのは、むずかしかったけれど楽しかった。今年も調査隊の活動に参加しているが、僕たち調査隊の田んぼへ行くのは、月に一度くらいの活動日だけだ。だから水のことなんて気にしたことなかった。

お父さんは、もう一か所ある井戸から別のポンプを持ってきた。いつもは二つの井戸から、それぞれのポンプで水をくみ上げて、だんだんになっている三枚の田んぼへ水を入れている。それが、しばらくの間一つの井戸から、一台のポンプでしか水を入れることができなくなった。お父さんは、長いホースとホースを接続して、あぜを通って上の田んぼから水を入れることにした。

「二龍、水が出るか見てて。」

とお父さんが言ったので、ぼくはホースの先の方へ走っていった。水は出てこない。ホースは、下の田んぼから上の田んぼへのびている。だいじょうぶかな。少し不安になった。

「あつ、きた。水がきた。お父さん、水が出てきたよ。」

ぼくは、井戸の中からホースを通して出てきた水に、(よくここまで来たね。)そんな気持ちになった。

稲は、穂が出る頃には水が必要だと、おじいちゃんが教えてくれた。ぼくは思った。

「稲のお母さんは田んぼ。夏の稲はまだ赤ちゃん。栄養が必要。太陽が必要。そして今は水が必要。ぼくにできることは、毎日声をかけて見守ること。」

お盆の頃になると、稲の穂がどんどん出てきた。水の管理がうまくいったのかな。うれしくなった。

今年はいつともより稲刈りが楽しみだ。後もう少し。がんばれたのむぞ、稲たち。